

赤谷プロジェクト近況報告

ほ乳類モニタリングワーキンググループの開催

6月26日(木)に利根沼田森林管理署会議室において、ほ乳類モニタリングワーキンググループが開催され、平成20年度調査の枠組みや調査項目について話し合いを行いました。

その中で、どのような森林をつくれれば、多様な動物種が適正な数で適正な関係を保ちながら生息できるかについて議論しました。

また、本年度新たに行う調査として、センサーカメラ約50台を用いた、赤谷全域のほ乳類の分布調査を行うことになりました。

この調査では、赤谷全域のほ乳類相を明らかにすること、同一地点にセンサーカメラを設置することによって、ほ乳類相の季節および経年変化を把握することを目的としています。

さらに、これらのデータを用いて各ほ乳類がどのような環境を好むか、各ほ乳類の潜在的な分布域はどの程度の広がりをもつかなども検討する予定です。

例えば、ツキノワグマなら、森林の状況が人工林か天然林か、森林の傾斜や日当たりの程度などの多くの環境因子を組み合わせることにより、その森林における潜在的なツキノワグマの分布状況を推定する手法が提示されました。

今後も専門家の意見を交えて、どのような森林が動物にとって棲みやすいかについて、検討を進めていきたいと考えています。



ほ乳類の生息に適した森づくりについて、専門家を交えて意見交換

森林ふれあい実務研修の実施

7月2日(水)～4日(金)に平成20年度森林ふれあい実務研修を各署の森林ふれあい業務担当者や森林官を対象に実施しました。センター職員から「いきもの村」で赤谷プロジェクトの解説や、現地のカラマツ漸伐試験地で植生復元モニタリングの説明やホンドテンのモニタリングの実習などを行いました。

また、赤谷センターでは環境教育プログラム作成に取り組んでいますが、この機会を利用して、各署における環境教育の取組についても意見交換を行い、今後の参考としていきたいと考えています。



カラマツ漸伐試験地で植生復元モニタリングについて解説

南ヶ谷(なんがや)湿原の調査



モリアオガエルの卵塊

南ヶ谷林道の大峰山西側付近には、「南ヶ谷湿原」と通称している湿原があります。「赤谷の森」では湿原は珍しく、湿原独特の植物や昆虫類が存在する可能性があります。また、地質の専門家によると湿原周辺はいわゆる「地すべり地形」であり、学術的にも防災の面からも研究対象となりうるということです。

7月の「赤谷の日」では、モリアオガエルの産卵状況を中心に調査を行いました。湿原を一周し、目測で卵塊の数をカウントしていったところ、モリアオガエルの卵塊は計114個発見され、昨年の同時期に比べるとやや増加していました。地上から5メートル以上の高木の枝先に産みつけられているケースもあり、モリアオガエルの逞しさに感心したところでした。

また、夏に日本で繁殖し、秋に南西諸島や台湾に渡っていくとされているアサギマダラの1個体を捕獲し、マーキングして放蝶し、追跡調査を行うこととしました。

今後も、継続的に南ヶ谷湿原の植生や生息している動物や昆虫類を調査し、学術的な価値や環境教育の場としての可能性を探っていきたいと考えています。



ギンリョウソウが沢山咲いていました